

[研究展望]

翻訳理論における文法理論と 実践への応用についての史的考察

松中完二*¹

Linguistic History of Translation Theories and Their Grammatical Application to Practices

Kanji MATSUNAKA

Abstract

Translation theory, a fundamental aspect of translation techniques, was integrated into linguistic research only through Roman Jakobson's 1963 definition of "translation" in "Essais de Linguistique Générale." Before this milestone, translation theory remained at the periphery of linguistic inquiries.

In 1959, Eugene Nida introduced and practiced the dynamic equivalence theory, which was a pivotal moment in the field's development. The theory provides a systematic framework for addressing translation complexities. This study focuses on Nida's dynamic equivalence theory, tracing its evolution in the linguistic context of translation studies. It also examines this theory's exploration of the intricate challenges of meaning, particularly when contrasted with Noam Chomsky's "Universal Grammar." Furthermore, this article explores a contemporary approach to equivalent translation based on recent advancements in cognitive semantics.

Keywords: 近代言語学, 翻訳理論, Nida, Dynamic Equivalence, 認知意味論

1. はじめに

翻訳とは、ある一言語を他言語に置き換えるという、言語接触に伴う人為的な言語の置換及び創出作業に他ならない。そこには、必然的に、翻訳する側としての言語と翻訳される側としての言語が存在することになる。それは、A という言語を B という言語に置き換える場合において、A は翻訳される側の言語であり、B は翻訳する側の言語ということになり、この場合、翻訳の学問的用語において、A は原語 (source language), B は受容言語 (target language 又は receptor language) という用語で表される。

そして、本稿で扱う翻訳とは、Roman Jakobson の唱える翻訳における三タイプ、すなわち Intralingual Translation (又は Rewording), Interlingual Translation (又は Translation Proper), Intersemiotic Translation (又は Transmutation), の三つにあって、二番目の Interlingual Translation を指して論考を進めるものである。Jakobson の唱えた翻訳における三タイプとは、Intralingual を母国語内の翻訳 (すなわち古典の現代語訳や方言の標準語訳等が考えられる) として捉え、Interlingual を母国語対外国語として捉え、Intersemiotic を記号間の翻訳(モールス信号の解釈や交通信号、標識などの解釈)として捉えている。

このことについて、Jakobson(1963:79)⁽⁹⁾は次のように説明している。

- “1) La traduction intralinguale ou reformulation (rewording) consiste en l'interprétation des signes linguistiques au moyen d'autres signes de la même langue.
 - 2) La traduction interlinguale ou traduction proprement dite consiste en l'interprétation des signes linguistiques au moyen d'une autre langue.
 - 3) La traduction intersemiotique ou transmutation consiste en l'interprétation des signes linguistiques au moyen de systèmes de signes non linguistiques.”
- 1)言語内翻訳,すなわち,言い換え rewording は,ことばの記号を同じ言語の他の記号で解釈することである。

*1 共通教育科
令和5年9月29日受理

2)言語間翻訳, すなわち, 本来の翻訳 translation は, 言葉の記号を他の言語で解釈することである.

3)記号法間翻訳 intersemiotic translation, すなわち, 移し替え transmutation は, ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈することである.(川本茂雄監修, 1973:57-58.)⁽¹⁰⁾

本稿では英語と日本語の二国語をその翻訳の研究対象として取るため, Interlingual の研究となる.

言語はそのまま, あるまとまった一つの意味概念を構成しており, 我々はその意味概念を母国語として理解, 把握するのに何ら困難を感じることはない. それは, A という言語においても B という言語においても, 同等に存在する現象である. このことを, 英語と日本語の場合を想定して言い換えれば, 日本人が日本語を母国語として把握, 理解し, それに基づいて日常の言語生活を営むことが可能であるのと同様, 欧米人は英語を母国語として把握, 理解し, それに基づいた日常の言語生活を営むことが可能なのである.

問題は, そのような母国語同士を接触させて, 一方の言語から意味概念を抽出し, しかもその意味概念を他方の言語における言語表現で等価な意味概念として表出する場合である. すなわちそれが翻訳の作業そのものであるが, 一方の言語が他方の言語で再生される過程において, 訳語は二言語間における様々な問題を映し出す鏡としての性質を自ずと内包しており, またそうした問題を最小限に抑制して受容言語に再生されることが望まれるものである. そして翻訳は, 一言語を他言語において等価な意味概念で以て再生することを理念としながらも, 翻訳の作業それ自体がそこにある問題から半永久的に逃れられないという自己矛盾を内包している.

しかし, そのような現実にも目を向けても, 伝達すべき意味概念や機能が二言語間における共通項として存在するところに翻訳の成立基盤としての言語の形態構造が並存しているのであり, 中村 元が 1939, 1949, 1959, そして 1964 年にハワイ大学で開かれた“東西哲学会議 (East-West Philosophers' Conference)”において, 日本語の欠陥を明らかにするものとして行なった指摘は, 日本語の形態構造を明確にするという点と, また日英両語における翻訳の成立基盤の礎を導き出す可能性といった点で, 注目に値する. 中村は Moore, C 編 (1967:179-200)⁽¹⁵⁾において, 英語に翻訳する際の日本語の欠点を次のように指摘している.

- (1) 複数を表わす接尾辞がないこと.
- (2) 抽象的な普遍性を軸とした思考が充分発達していないこと. そのことが日本語という言語の中にも見られる.
- (3) 英語の goodness の‘-ness’の部分のような抽象性をもった概念を表現する接尾辞がないこと.
- (4) 動詞の不定詞形がないこと.
- (5) 論理的思考を表わす語彙が不十分なこと.
- (6) 関係詞が存在しないこと.
- (7) 主語を省略すること.
- (8) 敬語に見られるように, 主語を述部動詞の中に組み込んでしまうこと.

中村の指摘は日本語の特性を主だって表したものとなっているが, 日本語のこうした特徴を踏まえたうえで, 翻訳は相互の言語の持つ特性を限りなく近づける作業に他ならない.

そこで, 本稿では翻訳の成立基盤として不可欠な翻訳の原理とその問題点について考察をすすめる.

2. 翻訳理論の成立

翻訳の理論化が強く望まれたのは, 主に機械翻訳の世界においてであった. その歴史は, 1940 年代中頃にアメリカで初めての電子計算機が開発されたのを追って, 機械翻訳の研究が始められたことに遡る. そして 1960 年代前後には, 世界の多くの研究機関が参加して, 活発な研究開発が進められた. しかしそこでは, 今日でも多分にそうであるが, いかにして原文と訳文の構造上の同一性を図り, その上で誤訳を生み出さないための理論を開発し, 適用するかといった問題が中心であった.

特に, 1957 年に Chomsky によって打ち出された生成変形文法や, 1968 年に Fillmore によって打ち出された格文法は, 文構造の解析と文章レベルでの機械翻訳への適用という視点から, 非常に大きな注目を集めた. しかし, そこでも自然言語の持つ多彩かつ柔軟な表現構造と曖昧さについての問題が全て解決したわけではなかった. 何故なら一口に文と言っても, そこには以下の長尾 真(1998:138)⁽¹⁶⁾が示すように, 様々な特性を持った文が存在するからである.

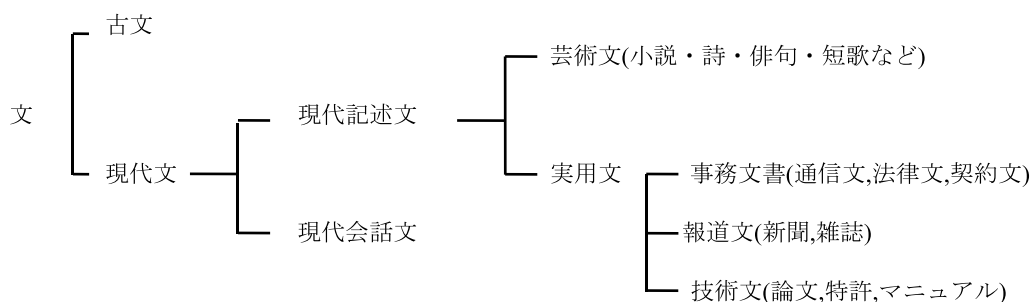


Fig.1 長尾 真による文の分類

文の単純明瞭さ、訳語と訳文の均質性といった問題から、機械翻訳に適した文の性質は実用文ということになり、結果的に機械翻訳は、実用文を対象にしか行われ得ないこととなる。機械翻訳は、対象となる言語の均質性を必要とするために、詩や小説といった芸術文の翻訳には適さないということになる。しかし現実には、川端康成の『雪国』の例を引き合いに出すまでもなく、多くの文学作品が翻訳され、評価されている。こうした翻訳作業は人間の頭の中で行われるものであり、その過程がどのようなものであるかを言語学的に明らかにしようとしたのが、Nida の「動的対応訳理論」である。Chomsky や Fillmore の理論が、実際に機械翻訳において応用され得る具体的言語理論であったのに対して、Nida の理論は、翻訳の過程そのものを図式化して表わすものであり、翻訳のあるべき姿について論じたものである。従って翻訳理論といっても、Chomsky, Fillmore, Nida らの理論と同じ土俵で論じることが不可能である。Nida の動的対応訳理論はその性質上、機械翻訳よりも人為的に行われる文学作品の翻訳へ応用されることになる。その点でこれら二つの翻訳理論は、その性質を異にする。

翻訳作業の過程が初めて理論化されたのは、Nida によってであった。したがって、Nida の理論は後に続く翻訳理論の基礎とも言えるものである。そこで、ここでは Nida の「動的対応訳理論」と呼ばれるその理論と、そこに内包している問題点について見ていく。

Nida 以前にも、翻訳について貴重な示唆を提示した人物は何人か存在する。その一人が前述した通り、翻訳の性質を定義付けた Jakobson であり、その他では、哲学的な見地から翻訳作業の原理について語った Benjamin (独 1892~1940) である。Benjamin は、表現形式とその本質という題材を取り上げて、諸言語が等しく目指す発展方向の極限に「純粋言語」というものを想定する。これがそれぞれの個別言語において、しかも他の諸言語の表現可能性の総体を内包するもので、翻訳者はそうした純粋言語の種子を育てようとする批評的な行為をその課題とする、と主張する。言い換えれば、翻訳の目指すものは原文の模写でも、原文の意味の伝達でもなく、むしろ二言語間の奥底の血縁関係(純粋言語)を発現させることに他ならないとする考えである。この考えは、後の Nida の「動的翻訳」における基本的考えとも相通じる部分がある。しかしこれらの論は言語学上の基盤を持った理論ではなく、一種の所感としての色合いが強かったため、学問的理論としてその後発展することにはなかった。その点で、Nida (1975)⁽²⁶⁾ の研究は生成文法に基づいた形態論の研究が中心であり、意味の研究・分析をすすめた Nida は、成分分析や包摂関係といった手法を基に、本格的に意味の研究に従事している。そして、語の成分分析を取り入れた翻訳論を精力的に展開している。彼の分析手法は、当時の生成文法を基盤に置く言語学の手法に則っており、そのため彼の翻訳理論も、少なからず生成文法的な色合いを濃くする分析方法であった。それ故、彼の翻訳理論が言語学の一研究部門として認識されるきっかけとなったと言ってもよいであろう。そこが Nida をして、翻訳理論の始祖とするゆえんである。彼は常に言語学の視点から翻訳を扱い、そしてそれを理論化した。そして Nida (1969)⁽²²⁾ によって、独自の翻訳理論である“Dynamic Equivalence (動的対応訳)”という立場を主張する。ここで Nida は、自らの新たな翻訳理論の展開と共に、その理論を聖書翻訳への応用を試みている。

3. Nida の「動的対応訳理論」

Nida の「動的対応訳理論」は、表現形式と意味、更にそれとの関わる社会、文化といった部分にまで立ち入って翻訳を理論化したものである。Nida の理論は、自身が聖書翻訳教会の人間であったことから、その理論の主眼点は聖書翻訳における表現形式と意味との一致、すなわち“等価な翻訳”といった点に集約される点に特色がある。

Nida は、翻訳には三つのレベルがあると考えた。その一つは言語学に立脚するもので、与えられた文の単語と構造とを他言語の対応する単語と構造に移し替える翻訳である。二つ目はコミュニケーション理論の立場に立脚するもので、発話文の持つ意味が同一になるように他言語の文を作り出そうとするものである。三つ目は社会言語学的な立場に立つもので、ある発話文がその社会で理解され、それが与える種々の効果と同一のものを他言語においても生じさせるような翻訳文を創出するという考え方である。そして Nida が取る立場は、この第三の翻訳理論である。Nida (1969:12)⁽²²⁾ はその専門上、聖書翻訳に携わりながら、聖書の翻訳は原文の形に捉われずに、最もうまく内容、感情等を伝えられる形で意識を行うべきであるとする。この点について Nida は、

“Translation consists in reproducing in the receptor language the closest natural equivalent of the source-language message, first in terms of meaning and secondly in terms of style.”

“翻訳とは原語で表現されている内容をそれにもっとも近く自然な受容言語で再現することであり、まず意味内容の点で、次に文体の点で原語と受容言語が実質的に対応するようにする”

(沢登春仁・升川 潔訳『翻訳—理論と実際』p.14.)⁽²³⁾

と述べ、形式の対応のために内容を犠牲にするのではなく、その逆の内容重視の対応を第一義とすると提唱している。これを Nida は“Dynamic Equivalence (動的対応訳)”と呼ぶ。この「動的対応訳」とは、沢登春仁・升川 潔訳(1973:216)⁽²³⁾によって、

“翻訳の形式よりも内容を重視した、最も自然で最も原文に近い翻訳で、原文の読者が感じるのと、本質的に同じ感じを読者に抱かせるようにするため、縦横無尽に工夫をこらした表現”

と定義付けられている。これは、別の言い方をすれば、翻訳とは、発話文の持っている意味、感情、芸術性等の全てが翻訳言語の世界に完全に移されるような表現を創出することであり、これを実現させるためには、まず発話文を完全に理解し、その発話文から離れた理解の世界を一旦作り、そこから翻訳言語の世界においてその理解の世界を文章によって再構築するという考え方である。

Nida 自身は、この発話文から離れた理解の世界を“kernel level(核文)”と呼び、その理論の中で訳文の生成される過程の根幹として扱う。この「核文」という考えは、Benjamin の言う「純粹言語」と通じるものであると考えられる。この考えは、言うならば、一方の文化から他方の文化への物事の考え方の変換・伝達であり、Nida のこうした姿勢は、芸術性を重んじる文芸作品の翻訳においては、極めて重要な位置を占める。しかし、Nida の理論における核文という概念についての説明が充分になされているとは言えず、そのために、Nida の理論は聖書翻訳や文学作品に対して感覚的に適用されることはあっても、その曖昧さゆえに、機械翻訳に応用されることはなかった。一方、言語学的な見地に立った理論の、機械翻訳への応用という点で顕著なものは、前述した Fillmore による格文法理論である。しかし格文法理論は、それを唱える各人によって格の数や名称に大きな異なりがあるため、Fillmore 以降の格文法理論については、ここでは特に触れない。また、独自の機械翻訳理論として注目に値するのは、長尾 真によって展開された EBMF 方式であろう。

Fillmore 以前に機械翻訳に応用されていたのは Chomsky の生成変形文法だが、それでは構造上類似した文の解析で誤った訳語、訳文を生成する可能性が高く、意味の生成という点で行き詰まりを見せていた。そうした意味の問題点を打開するために生まれたのが Fillmore の格文法である。Fillmore 自身も、本来は生成文法を修めた人間であるが、Chomsky の生成変形文法における標準理論、拡大標準理論、更にそれを受け入れない研究者達によって起こされた生成意味論のどれも意味の問題を解決し得ないものであるという事実に限界を感じ、意味の問題点に焦点を当てて、自ら生み出した理論が格文法理論である。この理論は、動詞が取る格を定め、それによって意味の立場から文の構造を解析するという、Nida の理論よりも厳密な枠組みを持つものであったため、必然的に機械翻訳に応用されることとなる。

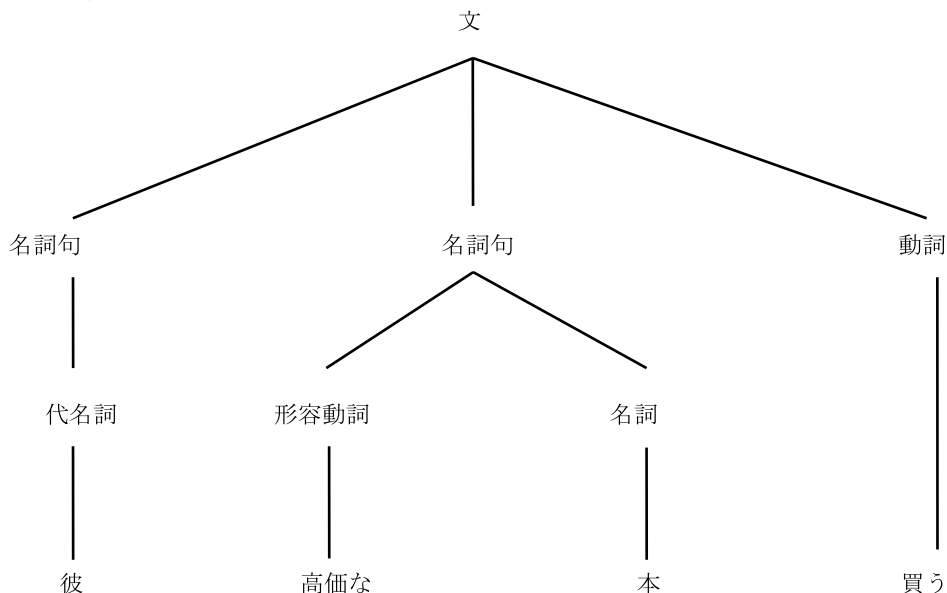


Fig.2 生成文法における句構造

例えば、「彼は書店で高価な本を買った」という文を、Chomsky による生成文法における句構造の樹形図と、Fillmore による格文法における樹形図で表わすと、Fig.2, Fig.3 のように明らかに文構造に違いが見られる。

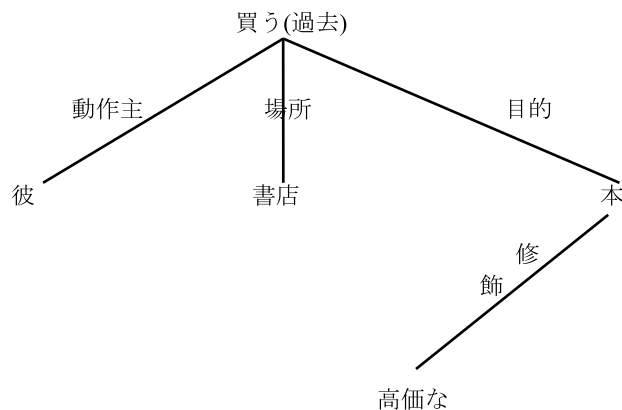


Fig.3 格文法における句構造

句構造の場合を格文法による解析結果と比べてみると、句構造の木では、木の枝の左右の位置関係が重要であるのに対して、格文法では木の枝の順番は本質的な問題ではなく、その代わりに木の枝についている情報が意味を決定するために重要となる。この理論の適用により、*Time flies like an arrow.* という文の、Chomsky の生成変形文法の適用で見られたような主部と述部の取り違いによる「時間虻は弓矢を好む」といった誤った意味認識を生むという問題は解決される。しかし、格文法では、何という格をいくつ決定するかについて、各人がまちまちの論を展開し、まるで規律の取れないものとなってしまう点で、枠組みの方向性の脆弱さが指摘された。しかし前述したように、機械翻訳では自然言語の持つ曖昧さ、特に芸術文の翻訳は今日にあってもその困難さは変わらず、一方で Nida の理論は機械翻訳へは応用され得ない側面を有している。しかし、Nida の理論をより精密化し、その格文法との融合によって、機械翻訳への応用も可能になりはしないか。これが可能になれば、おおよそあらゆる文の翻訳が一つのモデルでなし得る可能性が出てくるのではないかと考えられる。

Nida の“Dynamic Equivalence”という翻訳理論はその頭文字を取って、D-E 理論と省略して記される。本稿でも「動的対応訳理論」のことを省略して、以下、「D-E 理論」と記す。Nida の理論は、翻訳において取られる過程を三次元的に示し、翻訳をコミュニケーション過程の中に捉えた点で画期的なものであった。Nida の D-E 理論は、Brannen/沢登春仁 (1988:161)⁽³⁾ によって、次のように説明されている。

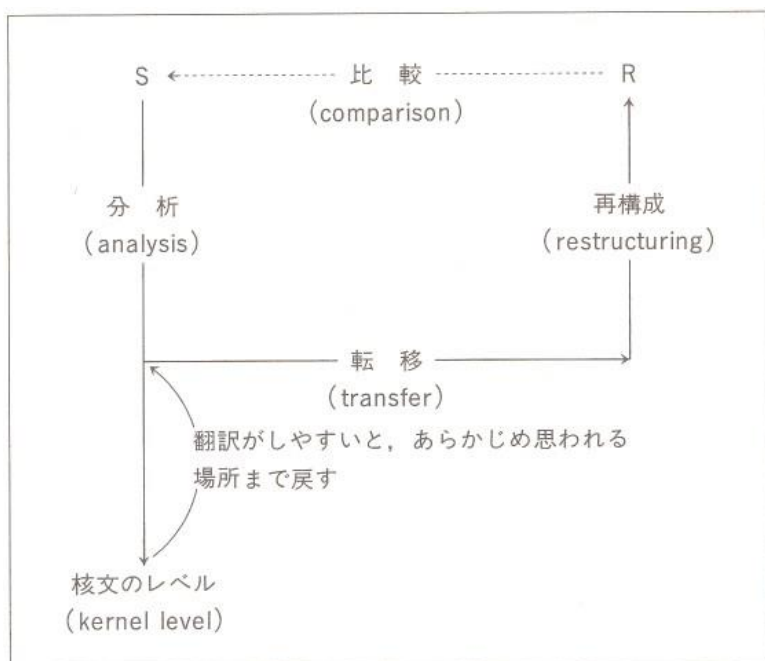


Fig.4 D-E 理論における翻訳過程

ここで、用語とそれを表わす記号について説明しておく。一般に翻訳理論では、翻訳される側の言語を「原語 (Source Language [SL])」、翻訳する側の言語を「受容言語または目標言語 (Target Language or Receptor Language [TL or RL])」と表わす。例えば、英語から日本語への翻訳の場合、英語が原語[SL]であり、日本語が受容言語[TR]になる。上の Nida の理論では S, R で表わされているが、この場合も S が原語を、R が受容言語を表わしている。また、ここでの分析とは、原語 A の表面構造を統語法、指示的意味、情緒的意味、前提、文体等の面から核文としてのレベルまで作り替える作業を指す。核文とは、原語 A において基底を成す意味概念や機能、及び効果を指す。再構成とは原語 A の伝達内容と等価な訳語、訳文を創出するために、受容言語 B の表面構造を統語法、指示的意味、情緒的意味、前提、文体等の面から、受容言語 B の核文のレベルを考察する作業を指す。比較とは、核文のレベルにまで分析した上で、再構成を経て出来上がった受容言語としての訳語、訳文が原語の意味概念や機能、効果を伝えるのに適当なものであるかどうか、様々な面から原語と照らし合わせて、その訳文全体の正確さや妥当性を調べる作業を指す。そして、翻訳の作業過程で生じる原語からも受容言語からも一種乖離した純粋な意味の理解の世界を、「核文 (kernel level)」として設定し、そこから再構成される文が訳文であると定義付けた。この「核文」という考えは、Benjamin の「純粹言語」という現象と同一の現象を指しているものと考えられる。

原語の意味は、一旦この「核文」のレベルにまで落とされ、そこで意味の解釈が行われる。そしてそれが場面や文脈、更には話者の感情といった心的様態等の要因により、原語から受容言語へと転移が行われ、最終的に再構成する段階においてどのような訳語を当て、それをどのような表現形式で再生されれば最も原語の意味内容や表現形式、更にはそこで伝えられるメッセージに肉迫するものであるかが決定される。

4. D-E 理論の実践

形式よりも内容を優先させるという Nida の翻訳原理が実際の翻訳作業に応用されたものが、尾山令仁の訳した『聖書 現代訳』(1983)⁽²⁸⁾ である。聖書翻訳の例を見ると、D-E 理論を適用したものとそうでないものは、次

のように大きな異なりが見られる。

“In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God.

This is the One who was in the beginning with God.

Through Him everything came into being and without Him nothing that exists came into being.

In Him was Life, and the Life was the Light of men.

The light shines in the darkness and the darkness did not overcome it.” (ヨハネの福音書)

“初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

この方は、初めに神とともにおられた。

すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。”(日本国際ギデオン協会訳)⁽¹¹⁾

“まだ、この世に何も無かった時、すでにキリストは存在しておられた。キリストは神と一緒におられ、また神ご自身であられた。

このように、キリストは神ご自身であられながら、唯一の神のうちにおられるもう一人の人格であられた。唯一の神には三人格があつて、父と子と聖霊である。キリストは子であられる。

すべてのものは、神によって造られた。だから、神であられるキリストによって造られないものは一つも無かった。

神であられるキリストには、本当の命があり、この命こそは、人間が歩む道を照らす光にほかならない。キリストの命は光として、闇の世界に輝いており、闇の世界は、決してこれに打ち勝つことはできない。”(尾山令仁 1983)⁽²⁸⁾

これらを見比べて即座に判別出来るのは、動的対応訳に基づいた尾山令仁の翻訳は、聖書の解釈を最大限にまでその訳文に取り入れ、受容言語である日本語の表現としてもなるべく自然な形を心がけながら、原文にはない背景知識を織り込んだ補足解釈的な訳文となっている点である。またそれにより、日常的な言語として分かりやすいものとなっている。

Nida (1969:22-24)⁽²⁴⁾ は、こうした訳文における補足解釈の必要な場合について、次のように述べている。

- (1) M1 にはない情報が M_χ には必要な場合。
- (2) M1 ではあいまいな情報が M_χ では必要な場合。
- (3) M1 ではどっちつかずの情報が M_χ では必要な場合。
- (4) M1 では暗示的な情報を M_χ では明示しなければならない場合。
- (5) M1 では明示的な情報を M_χ では別の取扱いにしなければならない場合。

(※M1 は原語のメッセージ, M_χ は受容言語のメッセージを表わす。)

また沢登春仁・升川 潔 (1973:40-46)⁽²³⁾ では、Nida (1969)⁽²⁴⁾ を補足する形で、聖書翻訳において優先すべき二つの視点とそこでの注意点について、次のように述べている。

“1. 話し言葉が書き言葉に優先する。

- (1) 英語の場合、大文字にすることによって、書き言葉なら訳文の意味の曖昧な点や誤解されるような点を防げるが、それだけでは充分といえない。
- (2) 発音しただけではまぎらわしく、文字に表わすと初めて判別できるような語があるが、話し言葉では困る。
- (3) 書き言葉としては卑俗でなくても、会話体としては卑俗な感じを与える語は、訳文に入れないほうがよい。
- (4) 文法上の構成や切れ目がはっきりしないからといってむやみに句読点を用いないほうがよい。

- (5) 修辭疑問に対して答のほうもつけ加えたほうがよい場合が多い。そうしないと聞く人が内容を誤解することがある。
- (6) 視覚的にはそうでないのに、たまたま口に出して読んでみると、変な語呂や卑俗な言葉になってしまうような訳語は避けたほうがよい。
- (7) 人名や地名など固有名詞は、受容者の言語の音体系の中で自然に発音できる読み方に変えて、翻訳を朗読する人が困惑しないように調整する必要がある。
- (8) 意味の不明確なものを、そのまま訳すのはよくない。
- (9) 情報量の多すぎる翻訳は避けるべきである。

2. その訳文の受容者の立場が、言語の形式よりも優先する。

- (1) 聖書の場合、キリスト教徒よりも、キリスト教徒でない人々の立場を優先する。
- (2) 老人や子供の言葉よりも、25 歳から 35 歳の人々の使う語法を優先する。
- (3) ある場合には、男性語より女性語を優先させる。”

先の聖書翻訳は、D-E 理論とその応用の成功例と見ることが出来る。尾山 (1983)⁽²⁸⁾ も、従来の聖書翻訳の難解さがこうした補足や言い換えによって、受容言語である日本語として自然な形で受け入れられやすいものとなっていると考えている。

Nida の D-E 理論は翻訳において取られる過程を如実に表わしたものとなっているが、これはあくまで人間の頭の中で感覚的に取られる作業の模式図で、核文と転移の過程が科学的に明かされたものではない。加えて、Nida の理論では、文章全体の内容を優先させるため、語のレベルにおける核文とその転移といった問題点は全くと言っていいほど、扱われてはいない。それ故に、翻訳理論の世界では、Nida の D-E 理論は高い評価を得ているものの、その理論が機械翻訳に応用されることはなかったのである。自然科学的に、厳密に理論化された枠組みが必要となる機械翻訳という世界では、Nida の理論は、その妥当性は認められるものの、意味の解析という点ではあまりに抽象的すぎて、結局機械翻訳への応用は適わなかったのである。意味の解析が抽象的に過ぎた理由は、先にも述べたように、やはり、核文という概念まで文の意味を分析するという概念とその行為、更にはそれを検証することで取られる転移の過程が明らかにされずじまいであったという点に回帰するであろう。

また Nida の理論は、主に聖書翻訳への適用を目指したものであり、それが後にブラネンらによって文学作品の翻訳への応用へと展開されたものの、日常における幅広い自然言語の翻訳への適用ではなかった。しかもそこでは、話し言葉よりも、必然的に書き言葉を扱ったものであることは、これまでの説明からも明らかであろう。

しかしこれは、Nida だけの責任ではない。Nida を初めとして、翻訳理論の研究対象は、文章全体の意味であり、そこでは、文章の中で再生される語に焦点を当てた研究はなされてこなかった。それはまさに生成文法が中心勢力となっていた現代言語学の中であって、Chomsky にしろ、Nida にしろ、果ては Fillmore でさえも、意味研究の対象が、無意識的な発話行為における日常言語、自然言語の研究ではなく、あくまで統語論の視点から不自然とも言えるような、すでに不備なく人為的に作られた文の意味解釈に傾倒していたことに責任の一端がある。そしてこの傾向は、生成文法とは対極に位置するとされるモンタギューによる形式意味論に至っても、ついに変わることはなかった。形式意味論においても、結局は人為的に作られた文の対象となる世界について、集合論や論理学の観点から理屈を付加するのみで、その結果、自然言語の発話行為の意味研究からは程遠いものとなってしまった。これは、生成文法の責任のみならず、もっと広義に視点を移せば、パロールよりもラングの研究を優先させてきたソシュールに端を発する現代の構造主義言語学の責任でもあろう。

このことについて、磯谷 孝 (1980:16-18)⁽⁸⁾ は次のように述べている。

“Nidaの翻訳理論には、少なくとも Chomsky までの現代アメリカ言語学の成果が反映されており、このことは同時に、後者の欠陥が Nida の理論の不備となって現れていることを意味する。たとえば、Chomsky は言語生成の理想的(純形式的で、どんな場合にもあてはまる、というほどの意味)モデルを作るために言語と現実とのかか

わりを一切捨象してしまった。Chomsky は、社会的規約としての言語と、この言語の運用によって実現される

言を区別したソシュールに範をもとめて言語能力と言語運用を区別し、前者すなわち、言語能力を言語研究の対象としたのである。話し手、聞き手の間のコミュニケーションの図式を考え、文をコミュニケーションの単位と認めて正しい文の生成規則の体系を作ろうとした点はソシュールより一段と前進しているが、文と現実のかかわり方を形式化するという重要な課題を無視したために、悪い意味で形式的なものになってしまった。(中略) 翻訳を実際に行うときには、言語と現実のかかわりがすぐに問題になるから、Nida もそうした個々のケースをよく取り挙げて意味の対応について論じていることはいるが、その翻訳理論の体系内での文の概念は、Chomsky のそれとあまり変わりが無い。文の意味は語の意義の総計とはかぎらず、文が言語外世界とかかわることによって(状況におかれた文 sentence を言表 utterance という)様々な変換意味を生じるし、我々がテキストで出くわす意味は(文法書の用例としての文とはちがいが)、様々な変換意味であるから、こうした変換のメカニズムがもっと検討されてよいのではないか。なるほど、Nida は、別のところで(R. A. プロイアー編『翻訳のすべて』収録の「翻訳の原理」)語の意義の総計が文の意味に等しくなるような内心構造と、文の意味が語義の総計以上に

なる外心構造を区別しているが、あまり展開されていない。(中略) つまり、文、言表の意味にも層があって、これを形式化することも必要なのである。”

実際、Chomsky の後で新たな言語理論を打ち立てた Chafe (1976)(6) は、文は古い情報を担った部 (旧情報) と新しい情報を担った部分 (新情報) に分けられ、語順は、古い情報を担った語から新しい情報を担った語へと移っていくものであるという、「旧情報・新情報」の理論を展開している。これはプラハ言語学サークルの研究成果である「言語の現実的区分」論を踏まえて完成したもので、談話文法において中心的役割を果たす理論である。しかしながら、Chomsky の理論では、この重要な要素すら扱われずにいたのである。当然、これは Nida の翻訳理論の不備としても現れてくる。それが、具体的には言語と現実の関わりという点で、その根幹となる語における意味の生成といった問題点が、全く論じられていないという現象となって姿を見せる。

言語と現実との関わりという点では、実際の発話においては、Jakobson (1963:209-220)(9) の唱えた「発話の六機能図式」が、最もその側面を如実に捉えたものであろう。それは、意味機能には (1)「指示機能 (referential function)」, (2)「心情的機能または表現的機能 (emotive or expressive function)」, (3)「能動的機能 (conative function)」, (4)「交話的機能 (phatic function)」, (5)「メタ言語的機能 (metalingual function)」, (6)「詩的機能 (poetic function)」が存在するというものである。翻訳理論も、こうした意味機能のレベルを考慮してそれぞれの段階で必要になる作業過程を明示していくことで、より完成度の高い翻訳理論が創出され得るであろう。

この点に関しても、同じく磯谷 孝 (1980:22-23)(8) が以下のような提言をしている。

“まず、比較対照言語学の見地に立つ言語分析で、ここでは (1) 語のレベル (指示的意味内包的意味、比喩などの語彙論的意義と文法的意義), (2) 文のレベル (文の形式統辞論的構造: 文の長短、リズムなど), (3) 言表のレベル (右に述べた意味作用論: 直義と転義、連想的意味 [慣用的なものとしてでないものがある]), 意味区分論 [主部、述部の区分, 古い情報, 新しい情報の区分], 機能的文体論, その他テキスト言語学やディスコース論で取り上げる諸問題)での検討が行われる。次に対応論で、ここでは対応の種類、対応実現の工夫 (翻訳語の選択), (きわめて広い意味での) 比較文化論 (文化の型、とりわけ活性的型と非活性的型。所与の文化のイデオロギー、世界観によって文、言表の意味が変わってくる) があるので、意味の最終的決定はこの文化の型とそれに対する話し手の態度によって決まる。原文と訳文における時間的、空間的距離、疎隔の処理。異質文化をそのまま紹介するか、訳文の文化に翻案するかの問題) 等々が検討される。最後に評価論で、原文と訳文の比較評価、翻訳者論などが取り上げられる。”

しかし、磯谷の区分に見られるこうした言語の意味機能は、それぞれが別個に独立して現出するものではなく、特に日常の言語活動においては、それらが複雑に絡み合って意味を形成する。そこでの意味の把握は、決して機械的なものではなく、あくまで人間が共通に習得している学習や経験によって認知され得るものである。

翻訳における等価という考え方については、賛否併せて立場が大きく分かれる。Catford (1965)(4), Nida and Taber (1969)(22), Toury (1980)(36), Pym (1992, 1995, 2004)(30,31,32), Koller (1995)(14)などは等価という考え方に肯定的でこの考えを積極的に採用する立場であるが、Snell-Hornby (1988)(35), Gentzler (1993, 2001)(5)らはこの考え方を否定する立場を取る。本研究では Nida の等価理論を踏襲し、Koller (1979, 1989)(12,13) が設定する、(1) 指示的 (referential), (2) コノテーション (connotation), (3) テキスト規範 (text-normative), (4) 語用論的 (pragmatic), (5) 形式的 (formal) という等価の 5 つのレベルを根底で支えるものとして、私が唱える認知的等価性が有効であることを次の機会に検証する。

近年、平沢慎也・野中大輔 (2022)(7) など、認知文法を基にした翻訳へ言及が見られる。平沢慎也・野中大輔 (2022)(7) では、認知文法と用法基盤モデルの視点を取り入れて翻訳のダイナミズムを説明づけようと試みるが、Nida の動的対応訳と本質的には変わりがないと思われる。そしてそうした意味の研究の充実こそが、とりまなおさず翻訳理論の進展へとつながるものであることは間違いない。翻訳の難しさは、表面的な言語表現の等価な移し変えのみならず、それによって伝達される人間の認知のレベルで意味の成分の共通項を言語表現として再生させることにある。そうすると、翻訳理論の確立に当たってまず手始めに考えられるのが、我々は如何にして語あるいは表現から意味を認知しているかという構図と、一語一語の具体的用例を基に、そこにある具体的意味概念を抽出することである。これまでの意味研究では、この部分の分析が見られなかったために、翻訳理論の発展も遅れたと考えられる。また、Nida の理論においても、この部分に対して、今一つ有効な解答が与えられなかった。そしてこれこそが、Nida の理論が機械翻訳に応用され得なかった理由でもある。そうであるならば、この部分において、有効な理論が打ち出され、一語一語の具体的用例研究を行ない得れば、翻訳理論として完成度の高い、また機械翻訳という実用的な面でも応用の可能な研究となるであろう。

文献

- (1) 別宮貞徳, “翻訳を学ぶ” (1975), 八潮出版社.
- (2) 別宮貞徳, “スタンダード英語講座 1 英文の翻訳” (1983), 大修館書店.
- (3) Brannen, N., 沢登春仁, “機能的翻訳のすすめ” (1988), パベル・プレス.
- (4) Catford, J. C., *A Linguistic Theory of Translation*, (1965), Oxford: Pergamon.
- (5) Gentzler, E., *Contemporary Translation Theories*, (1993/2001), London & New York: Routledge.
- (6) Chafe, W. L., Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. In C. N. Li ed., *Subjects and Topic*. (1976), Cambridge, Massachusetts: Academic Press.

- (7)平沢慎也, 野中大輔, “認知文法から考える「意訳／直訳」問題—「直訳」は本当に「直」なのか?—” ころしおオンラインイベント 認知文法から考える「意訳／直訳」問題, (2022), 発表資料
- (8)磯谷 孝, “翻訳と文化の記号論 文化落差のコミュニケーション”, (1980), 勁草書房.
- (9)Jakobson, R., *Essais de Linguistique Générale*, (1963), Paris: Editions de Minuit. ((10)川本茂雄監修, “一般言語学”, (1973), みすず書房.)
- (11)国際ギデオン協会, “英和対照 新約聖書”, (1985), 日本聖書刊行会.
- (12)Koller, W., *Einführung in die Übersetzungswissenschaft*, (1979), Heiderburg & Wiesbaden: Quelle und Meyer.
- (13)Koller, W., *Equivalence in Translation Theory*. In Chesterman, Andrew. ed., *Readings in Translation Theory*. (1989), pp.99-104. Helsinki: Oy Finn Lectura Ab.
- (14)Koller, W., *The Concept of Equivalence and the Object of Translation Studies*. *Target* 7(2), (1995), pp.191-222.
- (15)Moore, C.編, *The Japanese Mind*, (1967), Honolulu: East-West Press.
- (16)長尾 真他編, “岩波講座言語の科学 9 言語情報処理”, (1998), 岩波書店.
- (17)中野道雄, “翻訳を考える”, (1994), 三省堂.
- (18)成瀬武史, “翻訳の諸相—理論と実際—”, (1978), 開文社出版.
- (19)Nida, E., *Principles of Translation as Exemplified by Bible Translating*. In Reuben A. B. ed., *On translation*, (1959), pp.11-31. Oxford University Press.
- (20)Nida, E., *Toward A Science of Translation*, (1964), Leiden, Netherlands: E. J. Brill. ((21)成瀬武史, “翻訳学序説”, (1971), 開文社出版.)
- (22)Nida, E., Taber, C., Brannen, N., *The Theory and Practice of Translation*, (1969), Leiden: Published for the United Bible Societies by E.J.Brill. ((23)沢登春仁, 升川 潔訳, “翻訳—理論と実際” (1973), 研究社.)
- (24)Nida, E., Taber, C., Brannen, N., *The Theory and Practice of Translation*, (1969), Leiden: Published for the United Bible Societies by E. J. Brill. ((25)沢登春仁, 升川 潔訳, “翻訳—理論と実際”, (1973), 研究社出版.)
- (26)Nida, E., *Componential Analysis of Meaning*, (1975). The Hague, Paris, New York: Mouton Publishers. ((27)升川 潔, 沢登春仁訳, “意味の構造—成分分析”, (1977), 研究社.)
- (28)尾山令仁, “聖書 現代訳”, (1983), 新生出版社.
- (29)尾山礼仁, “聖書翻訳の歴史と現代訳”, (1989), 暁書房.
- (30)Pym, A., *Translation and Transfer*, (1992), Frankfurt: Peter Lang.
- (31)Pym, A., *European Translation Studies, une science qui dérange and Why Equivalence Needn't be a Dirty Word*. In *TTR: Traduction, Terminologie, Rédaction* 8(1), (1995), pp.153-176.
- (32)Pym, A., *The Moving Text: Localization, Translation and Distribution*, (2004), Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- (33)Seidensticker, E. G., 那須 聖, “日本語らしい表現から英語らしい表現へ”, (1962), 培風館.
- (34)新改訳聖書刊行会訳, “新改訳 英和対照新約聖書”, (1985), 日本聖書刊行会.
- (35)Snell-Hornby, Mary, *Translation Studies. An Integrated Approach*, (1988), Amsterdam: John Benjamins.
- (36)Toury, G., *In Search of a Theory of Translation*, (1980), Tel Aviv: Porter Institute.